

芦品郡遺族会

芦品郡遺族会の概況

沿革の概要

昭和二十年代芦品郡は、大正村、阿字村、河佐村、下川辺村、岩谷村、府中村、広谷村、栗生村、国府村、新市町、戸手村、網引村、常金丸村、藤尾村、有磨村、福相村、宜山村、駅家村、近田村、服部村の二十カ町村であり、各町村に二十年代に遺族会が出来たが、郡遺族会が出来たのはその後のようである。昭和二十年代町村合併が進み大正村阿字村が協和村に、河佐、下川辺、岩谷、府中、広谷、栗生、国府が府中市になり、有磨、福相が芦田町に、宜山、駅家、近田、服部が駅家町に、新市、戸手、網引、常金丸、藤尾が新市町となった。町村合併時代に遺族会は合併し活動が始めたようである。初代郡会長は駅家の日野基氏がなったように聞いているが、すべて故人となって居られるので不明である。

その当時は一日旅行や、靖国神社団参が行なわれていた。今は一郡一町の遺族会となり旧町村単位の遺族会がありその連合会が郡遺族会となつて居る。各地区（藤尾は除く）に忠魂碑や慰霊碑があり、各旧町村単位でお祭りをしているところである。

又毎年十月には新市町と町郷友会共催で七・一六柱のみたまを迎えて新市町戦没者追悼式が無宗派で婦人部九八名、青壮年部員数八一名行われ

多数の人が参拝している。

各地区では網引、新市地区では神式で常金丸、戸手地区は仏式で行われている。

あとがき

今後の遺族会運営を考える時、青壮年部の発展的活動を望むと共に、みたまの祭を続ける事が大事と考え、今、年金受給者が一名当り五万円を積み立てて、その利息で会の運営を行ふ準備をしている所である。

芦品郡遺族会（平成五年十一月十八日現在）

一、英霊柱数	七一六柱
一、婦人部員数	九八名
一、青壮年部員数	八一名

忠魂碑

うしとら神社境内（戸手地区）



櫻山神社境内（網引地区）



品治別神社境内（常金丸地区）



慰霊碑（芦品郡）



戦没者追悼式（芦品郡）

フィリッピン訪問感想記

芦品郡遺族会婦人部長 信岡光子

昭和五十二年十一月四日から九日までの日程で、日本遺族会婦人部代表九十二名はフィリッピン国の招待により一、慰霊二、親善、三、平和の推進の三つの目的で、十九時羽田発NW機で二十三時マニラ空港に着陸、フィリッピン国軍楽隊の歓迎に、又南国の香りゆたかなレイを各自かけていただき感激いたしました。在留中の宿舎、フィリッピンプラザホテルに全員無事旅装をときました。当ホテルは昨年竣工の最新設備で、東京の一流ホテルに並ぶとのことでした。

五日八時、特別バス三台に分乗マニラ東南百十キロメートルにある、カリラヤ日本戦没者慰霊碑に参拝。注、この場所は政府二億円、日本遺族会二億円出資して造られたジャパニーズパークです。十一時から三十三回合同慰霊祭及び奉菊祭が厳肅に盛大に行われました。

式典には随行の、在日フィリッピン大使館書記官、在郷軍人会長御夫妻、遺族会代表、婦人部代表、母の会代表、在フィリッピン特命全権大使、フィリッピン未亡人団体及び在郷軍人会等列席、開式に先だつて故国から持参の銘酒、名菓、果物、秋田米、郷土の菊……祭壇せましと供えられました。日本遺族会婦人部の花輪も飾られました。開式の辞につづいて両国国歌斉唱、小雨に煙る中で、中井団長の追悼の辞に皆様と共に涙ばかりでした。

善戦苦闘国難に殉じた霊も、今日は我が一行を喜んで迎えて下さったことでしょう。英霊も故国をしのばれるであろう馥郁と香る菊花を各自

一輪手向けました。各代表の挨拶で閉式。閉式後は全員で読経、心ゆくまで霊を弔いました。名残りを惜んで十七時ホテルに帰着。

十九時、両国親善の夕食会に出席いたしました。メインテーブルはフイリッピン女性最高の地位最高裁判事ハルナ女史注、国際婦人年には国際婦人会議場で堂々と代表を務められた女性一人者、在フイリッピン大使夫妻、他に各会代表数名、一行の正副団長、女史は愛は女性の姿、平和への道として内容豊かに十五分話されました。そばで通訳され伝えられました。なごやかなムードのうち二十一時終り、ハルナさんのお話の英文プリントを一部いただく。

六日リサル公園献花式に八時出発。この行程は大統領の母堂護衛の朱塗の車が先導車となりました。革命の士リサル氏と永えに伝える立派な立像、広い公園は清掃され正面通路の両側には軍隊が整列、軍楽隊の吹奏裡に献花いたしました。次に激戦地モンタルバン、ワワダム峡谷への坂道を一步一步ふみしめて登り、慰霊碑に各自持参のお供物、線香、ローソクを手向け全員で読経、玉碎地をしのびました。ここで戦死された御主人のためにNさんは、御家族の写真を持参、土にうめて思う事を話し、気持が軽くなったと聞かされました。帰路国立孤児院を親善訪問し、しばらく幼児の踊りや歌に時をすごしました。記念植樹、記念写真を撮り、手をさしのべる子供に幸せにと握手してここを後にしてホテルへ。

七日フイリッピン国立戦没者墓地及米軍墓地表敬参拝。美しい芝生に白い十字の墓はるか地平線の彼方までつづいていました。入り口に多くの人の名前を記してありました。心から冥福をお祈りしました。次に、国立病院慰問戦傷者、在郷軍人及びその家族のリハビリテーション、回

復をお祈りして記念植樹、午後モンテンルパ慰霊碑巡拝、モンテンルパの悲しい歌を思い現在の刑務所の通路を歩いて丘の上に登り慰霊碑に礼拝しました。案内の方が丘の向側で日本の将兵が多く亡くなられたと話されました。大きな木が所々にありました。思い出の数々を秘めているでしょう。ここでも持参のお供をして香華を手向け、全員読経当時をしのび涙しました。帰路忘れがちなモンテンルパの歌を皆で口ずさみました。途中ショッピング案内で土産物を色々と物色しました。ドルとペソ、円を比較してとまどいました。やはりドルが一番使いよいと感じました。

八日コレヒドール島激戦地へ水中翼船で行き慰霊碑のある山へ登りました。高さ八〇〇フィートときぎました。山の中伏にトンネルをつくり、両側に千人もはいれる壕が無数にありました。一〇〇米陣地(米軍)も今は風雨にさらされ残骸を止めております。この台地には処を違えて日本軍の高射砲、米軍の高射砲、当時を偲ぶものがありました。丘の上遙か海を見渡す一角に日本将兵の墓標がありました。他県の墓標も立っておりました。ここで散華された方でしょう。白紙におしるしを書かれ墓標にはられました。皆で持参のもの等お供えして、香華を手向け読経、心ゆくまで弔いました。記念撮影してお別れしました。

夜はサヨナラパーティーを観光省屋上食堂に案内され、各界代表のステートメント、現地に伝わる芸能の数々手厚いおもてなしをいただきました。無量でした。二十二時、ホテルに帰りこの旅行最後の夜を眠りにつきました。

九日いよいよ帰国、お世話になった方々に感謝のお礼も済ませて八時三十分マニラ空港へ、出国の手続に時間がかかりました。途中沖縄で機の故障等で約二時間位待ち、十八時三十分全員無事帰りました。広島県

は、山県郡の中東さん、西条の向井さん、私の三人参加しました。皆様
に大変お世話になりましたことに感謝申し上げ私の訪問記といたします。
す。

過ぎし日の苦しみ

悲しみを顧みて

新市町下安井一三二一 高橋 文子

現在年八十才を迎え、過去五十年を振り返ってしみじみと、生きて来た、人生の苦しみを味わう。

私十六才にして、母親を失い幼い弟・妹を育てる立場に成りました。娘の私の胸にひしひしと迫りくる思いは、つらいつらい事ばかりでございました。当時の農家の生活は決して楽なものではなく、一家者達の衣食住をしのぐ事がやっとで、子供の教育を望んでも、簡単に出来る事ではありませんでした。其の状態の中で弟が県立府中中学校に受験を熱望するに及び学費の支出に見込みがたたないまま、老父と力を合せて力の限りをつくして働いて働いて働きつづけて学費を求め、卒業後、飛行学校に入学致しました。又妹が女学校を志望して泣いてすごるので、老父と身を粉にして働いて望みをかなえてやりました。更に上級学校を望み、これもなんとかして卒業させました。

私は二十五才で結婚し二児の母親になりましたが、夫は支那事変の戦場にかり出され、幸運にも生還が出来ました。其の後時を経ずして再度

の招集令状に接し勇躍して出征致しました。又も元気で復員致しました。これにて兵役の務めは終わったものと思っておりました。ところが間もなく三度目の赤紙に接し、又戦の途に出向かねばならなくなりました。歎呼の声に送られて、ふる里を後にして出て行く主人の胸中、此度は格別のものがあつたものと、私には強く受止める事が出来ました。私は二人の幼児を連れて夫の出て行く後をどこまでもどこまでも追いかけて、父と子供の別れを惜しまずにはおられませんでした。それはそれは悲しい生別に外なりません。其の別れが永遠の別れになりました。故郷を遙か遠く離れたボルネオの地に我が子を思い家族を胸に抱きしめて、三十四才を一期として戦死致しました。ある時は輸送船がげき沈まれ海中におぼれ、九死に一生を得たものの幽明境を異にする人生のはかなさつづさに感じ入りました。悲しい悲しい涙の乾かぬうちに、老父と苦勞を積ねて教養を身につけさせた弟がレイテ島の決戦に苦戦に苦戦を重ね、ついにはフィリッピンの空に散華した。主人について弟の戦死の報に接した。私の信じる事も出来ない虚空を感じる有様で御座いました。私の娘時代から此の方、苦しみと限らない苦勞の積み重ねは、こんな仕打に終った様な次第で御座います。悲しみに泣き、天を恨む私の心情はどなたにもわかって頂く事は出来ません。

痛恨の運命に屈する私の目の前は真暗な闇で御座います。老父にすがり末亡人として立上る勇氣を振りしぼっても、悲しみをのりこえる事は出来ませんでした。二人の子供を残して先立たれ主人の冥福を祈りながら子育てに立ち向かわねばならなくなった私には、又々苦しみが伴う毎日が続きました。「信は力なり、信ずる者は強し」と教わりました。希望を持って二人の子の将来を夢見て、どんな苦勞も必ずむくわれる事を

信じて力の限りを尽くして働き続けました。今は天国にいる夫と弟の冥福を祈りつつ、二人の子供の成長に今の喜びを感じています。

苦しい思い出

新市町金丸 渡辺 八重美

先日会長さんよりお話がありまして、遺族としての体験を書いてくれる様に申されましたので、思い出し乍ら書く事にしました。

私は大正九年二月五日生まれです。今年七四才になり年を取り色々困っています。前後して申しわけございません。私は金丸小学校から高等科迄学校に行きました。実家が百姓なのでよく手伝っていました。

去る昭和十五年一月に駅家町に住む主人と結婚しました。当日主人は菓子製造業でお店をしていました。私も嫁いでは一緒に手伝っていました。日々戦争がきびしくなり、昭和十八年教育召集で三ヶ月松江に教育に行きました。約三ヶ月がすみ、一旦家にかえり、むずかし乍ら商売をしていましたが、昭和十九年八月再度の召集を受け出征しました。

似之島に集結して船ばく隊輸送船にて出港したらしく、其後は連絡なしで、昭和十九年十月二十六日、比島バシー海峡にて船もろ共玉さい戦死の公報を受けました。其の時を思い出すのも残念でした。皆様も同じお気持ちで過ごされた事と思います。

私は結婚生活約四年で、其の間二人の女の子に恵まれましたが、長女は三才で病魔におかされ死亡しました。今は次女一人になりました。親子で暮していましたが、商売も出来ず、私達貸家にて暮していましたが、

生活も苦しくなり生れ故郷の金丸にかえって来ました。当日は父母も元気でいましたので色々と面倒を見てくれていて、とても助かり有難いと思っています。其の内二十三年弟が復員してかえり、又弟も結婚するし、私達も同居ばかりも出来ず、昭和二十四年に別居しまして、本家の二階を直してもらい、私も商売したり貸本したり、又新聞取扱店を始めました。夜は夜中迄縫物をして、色々ががんばったものです。まだまだ私も若かったので、がんばって自分の家を持ちたい為に朝早くから夜おそく迄やったものです。

お陰様で昭和三十五年に今の家を建てました。新築と同じに七月に、うどん、そばの店を始め、今日に至りました。今年で三十五年にもなります。お陰様で繁昌しています。有難い事と感謝しています。

後もう一言、つけ加えれば、昭和四十三年縁ありまして、一人娘に養子を迎えました。これで私の務も大分すんで、やれやれと思っていました。処、きたいしていた通りの養子ではなく、家の為にならぬ事を色々としでかし、私に心配かけて、これからのんびりと思う間もなく、私の重荷になり、結婚二十七年にもなり、孫も男子が一人、今年大学も出ました。他には何にも心配はありませんが、私も心労が重なり五十五年度から三回も病院に入院しました。心配やらつかれやらで迷惑かけました。今の処店の方も娘がやってくれるので、私は出来るだけ、手伝ってやりたいと思っています。

私の一言で申訳ありませんが、悪しからず、文面が後先になっすみません。

戦後五十年を迎えるに当って

新市町常一二四〇 内田 明 勲

折りしも「第十二回アジア競技大会・広島一九九四」の真最中である。

首都以外の地方都市で、はじめて開催されるアジア大会が「平和都市広島」で開催されることの意義について、新聞やテレビが連日大きく報道している。戦時中に生まれたとは言え、意識の中に、戦争の実体験を持たない私にとっては、報道の内容を全て、正しく理解できているかと言うと、疑問符をつけざるを得ない。しかし、どんなに美辞麗句を並らべたてた理屈づけよりも、平和とは直接膚で感じることでと十月十日付の新聞が教えてくれた。

長い長い内戦にやっと終始符を打って、二十年ぶりに国際スポーツの舞台に復帰した、カンボジアの二選手が、男子マラソンで見事完走・十三位・十四位でゴールした記事である。その見出しを拾ってみよう。

「平和への道」完走。

「国に希望を持って帰れる。」

トップから四十六分。観客も待った。

長びいた内戦で、生きるのに精一杯だった。国際大会なんて夢のことだと思っていた。日本語は分からないけど、広島の人が声援を送り、国旗を振ってくれたのが本当に嬉しかった。ゴールしたあと、気持が高ぶって何も見えなくなってしまった。この感動を国の若者達に伝えたい。これは完走した十四選手の中で、最後にゴールしたボウ選手の談話である。ちなみに、ボウ選手は国のぬかるみ道でつくった自己記録を二十五

分も大幅に短縮する好記録であったと言う。

他国の選手達から見ると、羨しくて仕方のない程の平和な日々を、ごく当たり前のこととして、毎日を送っている私達にとって、このボウ選手が感じた程の感動を、果たして、今までに感じたことがあるだろうかと考え込んでしまいました。

充分過ぎる程の物資に恵まれ、治安の心配もなく、自分のやりたいことは何でも自由にやれて……。こんな平和な毎日でも幾多先人の数えきれない程の多くの犠牲と、血の滲じむ様な努力の結果である。と改めて思いを致す所であります。

私も昨年五月に、先の大戦で戦地に散った父の五十回忌の法要を済ませました。墓誌が昭和十七年生まれの私が満二才に満たないうちの十九年没と記している。従って、私には父の記憶、思い出と言ったものは、何一つとして残っていない。強いて挙げるとするならば、父が戦地に赴く直前に行った最後の面会の場面を話す母の言葉だけである。

「お前がやっとよちよち歩きを始めた頃じゃった。お父さんの軍帽をかぶり、軍刀を腰に下げて、一歩歩いては転び、また一歩歩いては転んだ。面会時間が過ぎて、いよいよ別れにやあいけん時が来た。寝息をたてている私を覗き込んで、しばらく見つめとっちゃった。起こせば、別れん言うて泣くけえ、起こしちゃあいけんよ。と言う母の言葉をふりきって、無理やり起こして、抱きあげちゃった。それがあんと、お父さんの最後の別れよ……。」

私と父が別れた日、それはとりもなおさず、母にとっても、私達十才をかしらに四人の兄弟にとっても、生きるための戦いが始まった日に他ならない。母はそれ以後、私達四人の子供を育てるために懸命に働いて

くれた。昼間は近くの工場で働き、夜は夜で、御近所の仕立て物や編み物の内職をやった。二つ年上の兄が「お母さんはいつ寝とるんか？」と聞いた様に、私達には母の寝顔を見ると言うことは、決してないことだった。黒くて粘っこい膏藥がアカギレの指に何本も巻かれていたのもこの頃だった。子育てに懸命だった母の姿は、私達四人兄弟の脳裏に深く刻み込まれたのは言うまでもない。そして私達にとって「母に心配をかけないこと。」と「学校では一生懸命勉強すること。」この二つが母に対する私達の最低限度の努めとなった。ある同級生が「今度の期末試験で十番以内に入ったら、何処何処へ食事に連れて行って貰えるんだ。」と言った時がある。経済的に苦しかった私達にとっては、そう言った事は皆無であつたが「どんな粗末な着物を着て行っても、学校へだけは胸を張って行ける。」と言ってくれた母の言葉は、どんなほう美にも増して胸にしみたものだ。

戦後五十年を迎え、私も三人の子供の親となった。寝ている私を、無理やり起こして抱きあげた父の気持が、勿論私でもそうしたのであらうと素直に理解できる年令になった。私達が育った苦しい生活環境を子供達に経験させようとは決して思っていない。しかし今日の「平和を享受する日々」を満喫しているかげに、こうした苦しい過去があつた事だけは、またこの平和な暮らしを逸する様な愚かなことだけは、決して繰返してはならないと言う事を、子供達にも話しておきたいと思う。

日本も国連安保理の常任理事国入り云々の記事を最近よく目にするようになった。と同時に従軍慰安婦・南京大虐殺などの言葉をよく耳にします。今こそ、戦後処理を確実に果たし、国は世界に対し、個人は社会に対し、どんな貢献ができるか、一人一人考えて見る時が来た様に思う。

昨今であります。

苦しかった思い出

新市町 真田 伊典

戦に敗れて四十八年たちました。此度、小生にとりましては唐突に、青壮年部の一員として（小生六十五才）、父戦死後の苦労等について文章をとの依頼をお受けし、様な思いがよぎり、複雑な心境であります。折にふれて、父の事を思い出します時、一番に思いますのは、小生は、父より二十年の有余も長生きして、この平和な、物の豊かな世の中に暮らせていただいていう事です。申訳ないという気持がします。父に、今一度甦って、現在の日本の姿を見てほしいという思いにかられます。

父が戦死したのは、小生十六才の時でありました。母は三十五才、家族は他に祖母、小生の妹、第四人でした。末の弟は一才で、父の弟は写真で知るだけです。

戦死の公報が届いて後に、父の本籍地である芦品郡新市町に帰りまして。戦時中から、敗戦後へかけての食糧難、物も金も無く、不慣れた土地での生活、負け戦の軍人の遺族ということで肩身の狭い思いをしました。母は、肋膜炎を病んでの病弱の身で、足の骨を折って寝たきりの祖母を始め、五人の子供の生活を支えるのは、並大抵の事ではなかったと思われまふ。加えて農地解放で、祖先伝来の田畑を失い、生活の基盤から揺るぎ、散々なものでした。このような生活難は、私達だけでなく、当

時の大方の日本人が味わったものでした。筍生活も限度に達する頃、遺族会の皆様の御骨折りで、扶助料もいただけるようになり、やっと息をつくことができました。

祖母は、昭和二十九年に亡くなり、母は、父という大黒柱を失った一家をその細腕で支え、貧しいながら子ども五人を成人させ、それぞれに結婚させ、ほっと一息ついたところで再度病に倒れ、昭和六十一年七十七才で他界致しました。小生としましては、母は病弱の身ではありませんが、孫の成人の姿まで見とどけることができましたことは、有難い事と思っております。現在、小生等兄弟の夫婦は、何とか無事に過ごしております。皆様のお陰と感謝致しております。

戦争では多くの尊い生命が失われました。又戦争による苦しみは、女性、子ども達の肩に大きくのしかかっていきます。近時、PKOによるカンボジア等への自衛隊の派遣が行われましたが、今後、隊員の方に、万一の事があった場合は、礼を尽した葬送は勿論の事、家族の方の生活を万全に支えるに足る、特に子弟の教育には充分な、実質的な援助を切望するものです。

戦後、父と同じ艦の乗組の生存者の方々の御世話で慰霊碑建立、慰霊祭を行なっていただきましたが、五十回忌をむかえる本年を期に、最後の慰霊祭を行なうことになりました。会員の方々の高齢化の為、余儀無い事です。今迄の御苦勞に深謝致します。艦の母港である呉の海軍基地、護国神社、新市町、遺族会等による追悼式は、今後も続けられることと、真に有難く思っております。

国の発展と、家族の安全を祈って尊い一命を捧げられた英霊の顕彰には遺族会が大きく関わると思います。遺族会の会員の高齢化が進

んでおります現在、遺族会の将来の展望はどうなるのかと気にかかります。

又、英霊の御遺志を実現する事は、戦後続けてきました平和の維持にあると思います。再び耳に心地良い言葉に誘われて、戦争の惨禍を繰返してはなりません。今後の平和を心より御祈ります。